子どもの少ない時代こそ
幼児教育の見直しを…

～次世代に向かって力をつける時が今！～

渡辺　真一

一、はじめに

一月二十一日、突然、編集部から原稿依頼を受けた。そのきっかけは平成四年十一月二十三日発行、日本経済新聞社の月曜レポート「二世園長、改革に挑戦」（関西版は「園児集め競争に二世園長、反旗」とでたが…）なる記事がきっかけであるとのことであった。

さてこの記事の反響は予想以上に大きく、多少の戸惑いを覚えるところであった。なぜなら記事を読まれた読者（主に異業種に属する方がた）からの問合せや質問があとをたたず、改めて幼児人口減少の時代に生き抜く異業種の関心の高さを思い知らされた。そんな折にいただいた原稿依頼ゆえ、お受けすることとした。

二、前途多難な私立幼稚園

ところで近年の私立幼稚園を取り巻く動きには非常に厳しいものがある。出生率の低下に伴う休・廃園問題、

私幼に対する経常費補助の見直しの動き、公立幼稚園三歳児就園の促進、労働基準法の改正、就業規則の見直し、人材確保の問題、教職員の人づくり、園内研修のあり方、教育環境・職場環境の改善、教育内容の一層の充実化…と、前途多難を感じさせる課題が山積するなか、厚生省が二月二十五日、保育問題検討会を設置し、保育所制度を大幅に見直すとのニュースが伝えられるに至り、全国の幼稚園の在籍園児数79・6％を占める私立幼稚園の今後の運営、経営に暗雲たちこめる感ありといえる。次世代に向かって力をつけるときが今だとすれば、私幼人の老・壮・青が一丸となり今かかえる難題の一つ一つをクリアーしていく団結力とエネルギーが必要な時であろう。

三、全幼交の設立

現在、私幼を取り巻く多くの課題にふれたが、じつは次世代の私幼の永続性を願う難題に「二世・後継者」問題がある。異業種も近年は世代交替期にあると聞く。私幼界にもこの波はじわじわと押し寄せてきているが…、現実は異業種に比べて世代交替のタイミングがつかみきれてないケースが多いようである。

そこで平成元年七月、北海道から九州までの私幼二世・後継者の有志が一堂に参集し、「全国私立幼稚園若手設置者・園長交流会（略称・全幼交）」なるプライベイトの会を発足した。この会は日本私立幼稚園連合会の時代に二十～三十歳代の若手（二世・後継者）が、団体主催の諸大会や研究会で出会い、それぞれ地域の様子や自園・自身の悩みをぶつけ合い、共に考え、励まし合うなど回を重ねるなかから誕生した会である。大なり小なりの危機意識を持ち合わせた仲間が、二世・後継者の立場から今後の私立幼稚園経営・運営のあり方について情報交換や研修を深め、将来への連携を密にとの思いが込められている。会設立時の趣意書には次のように記されている。

＊

『近年、就園対象児が年々減り始め、そのことが、

幼稚園の存立自体に大きな影響を及ぼし、様々な問題を引き起こし始めている。昭和四十年代は幼稚園があれば良い時代、五十年代は建物の立派さが要求された時代、そして平成時代は幼児教育の内容を問われる時代とも言われている。

一方、園長は世代交替の時期を迎えつつあるが、必ずしも世代交替は旨く進んでいるとは言えない状況がある。その原因としては、次代を担う若い世代が未だ力不足であったり、一世の影に隠れてその実力を発揮できないでいたりする事があげられる。

かかる時に、次代を担う若い世代の園長や園長職に就こうとする者は、園の最高責任者として、幼児教育の本質を見失うことなく、そして、それをしっかりと自分のものとして消化する能力を必要とされるであろう。

そこで時代を担う幼児教育者の資質向上ならびに情報交換の場として、既成の団体では出来ない研修の会とするため、ここに全国私立幼稚園若手設置者園長交流会を設立するものとする』

四、全幼交の活動と今後

さて上記の趣意書に賛同した仲間が参集しこれまで四回の大会を開催した。この会は会の運営上、参加人数を

一〇〇人定員とし密度の濃い運営を心掛けている。以下、第四回大会までの記録を簡単にまとめてみる。

〈第一回大会の内容〉

(1)基調講演／幼児教育の現状と将来動向（三菱総合研究所）

(2)問題提起／わたしの園運営（東日本・西日本　各二園）

(3)ディスカッション／そこが知りたい園運営

○園庭・保育室の環境　○保護者との対応

○教師との対応　○効果的な園児募集とは…

(4)工場見学／河合楽器竜洋工場

〈第二回大会の内容〉

(1)基調講演&質疑応答／女子職員教育の動向～職場でやる気を持たせるには～

○国際ホテルレストラン学校副校長　八幡瑛一氏

○ニッセイ商事㈱東京事業部取締役業務部長　安斎寅喜氏

(2)問題提起／わたしの園運営（北海道、京都）

／現状報告（各都道府県）

／ディスカッション

(3)ディスカッション／そこが知りたい園運営

○職員採用と人件費のあり方　○保護者との対応

○教師との対応　○効果的な園児募集とは…

(4)落語家を囲んで／ロールプレイ方式による、挨拶・苦情の処理など園長等の語り方について

○三遊亭京楽師匠

〈第三回大会の内容〉

(1)講演&質疑応答／幼稚園のソフトとハードの見直し

○園の建物、空間を考える（藤田建築設計事務所）

○園内の事故について（ＡＩＵ保険）

(2)講演&質疑応答／東京ディズニーランドのサービスと職員教育

○㈱オリエンタルランド常務取締役　北村和久氏

(3)ディスカッション／そこが知りたいあなたの園運営

○父親を引き込む園経営　○中間管理職としての後継者

○園の物的環境を考える　○人材確保及び園内研修

(4)講演&質疑応答／新教育要領を斬る

○文部省初等中等局幼稚園課教科調査官　柴崎正行氏

〈第四回大会の内容〉

(1)講演&ディスカッション／今、保育に求められるものは何か！

○文部省初等中等局幼稚園課教科調査官　柴崎正行氏

(2)ディベート（一つの争点を論議という形で解決策を見出すために行う論議の形式をいい、問題提起をめぐって肯定派と否定派に別れ、主張をぶつけあう）

○定員オーバー　○完全五日制　○英才教育　○制服（園児・教職員）　○延長保育　○給食など

(3)意見発表／リーダーとしての設置者・園長のあり方を考える

（栃木・神奈川・千葉）

講演／同右のテーマを受けて

○経営コンサルタント　川上真央氏

ディスカッション（参加者全員、川上先生）

(4)講演／若手女子職員のプロ意識高揚のさせ方

○㈱コスモジェフィー代表取締役　浜田マキ子氏

以上、第四回大会までの内容紹介であるが、この大会に参加するについて、当日の運営をスムーズに運ぶための資料を一〇〇部、持参してもらうのも本会の特色といえよう。ちなみに第一回の持参資料は、(1)園庭・保育室の環境に関する資料　(2)保護者向けの印刷物などの資料　(3)教職員との対応に関する資料　(4)園児募集に関する資料などであった。

第五回大会は東京ベイにて開催し、今後の更なる深まりを求めるとともに、会員相互の結びつきが強固になること、そして設立の趣旨に基づく地道な活動を通して、諸先輩が築いてくれた私幼が継承できる力を身につけたいと念ずるところである。

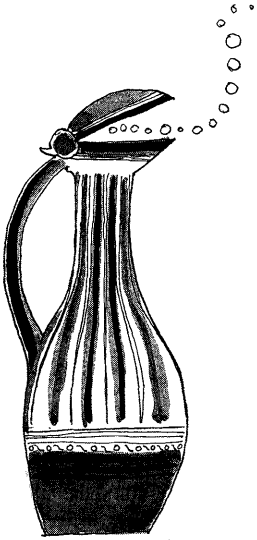
五、全幼交のめざす幼稚園

〝子どもの少ない時代こそ、幼児教育の見直し…を〟これこそ全幼交が願う活動の行先である。諸先輩は幼稚園教育の歴史と建物を築いてくれた。この事実を受けとめ次なる課題は当然のこととして、教育内容の充実、設置者・園長を含むスタッフの資質の向上、少子化時代に耐えうる経営基盤の確立、地域社会の市民権が得られる

私幼、そして二でふれた難題を一つ一つ乗りきりながら、〃幼児教育のあり方とは〃を、全幼交に所属する園にかぎらずすべての私幼それぞれが考求してほしいと願う。

さて、幼児教育は少なくとも小学校教育とは異なり、また小学校教育の下請けであってはならないと考える。また学校教育法の第七七条に、「幼稚園は、幼児を保育し、適当な環境を与えて、その心身の発達を助長することを目的とする」とある。当然のことながら幼児の心身の発達にとりマイナスとなるような教育実践の姿は好ましくないだろう。

園児減少の折、生き残りをかけて英語、漢字教育やパソコン教室などの英才教室、絵画や音楽による情操教育など特色づくりにしのぎを削る園が増えるようでは困る。なぜならこうした単なる人集めだけの競争は、園児のためにも幼稚園のためにもならないと考えるからである。五年、十年先の私幼と二十一世紀に生きぬく子どもたちを願ったとき、できるかぎり本来の幼児教育を目指すことが今、私幼全体に課せられた課題であろう。全幼交では目指す幼児教育のひとつの柱に「遊び」を位置づけ、「遊び」を通して子どもたちが様々な体験のできる園生活の実践を…と取り組むところである。「幼稚園における教育は……遊びを通しての指導を中心として行わ



れる必要がある」（幼稚園教育指導書増補版）と明記されていることに鑑み、幼児の特性が十分に発揮できる幼児教育を強く一般社会にアピールする時が今であろう。幼児教育の重要性が叫ばれて久しいが、未だ幼児教育への理解が一般社会に浸透し得ていない一因が「遊び」であると思えてならない。それゆえにもっと「遊び」を取り入れるなどした新たな幼稚園像をつくり出さねばならない。全幼交のめざす幼稚園の大きな願いである。

六、私の園の実践からひとこと

ここで当園の実践についてふれてみたい。当園は高層住宅（十三階）の一階に園舎をもつという、きわめて都市型の幼稚園である。昭和五一年から五二年にかけて、一挙に一つの町（五棟・一八〇〇世帯）が形成され、新住宅と新幼稚園、そして幼稚園と地元の出合いがあった。その姿は、今思えば、家庭と園、園と地域が連携し合う土壌として、実によい条件にあったと考える。

新設の園（昭和五二年四月開園）は、〝親と子と先生の手づくりで〟……というスローガンではじまった。この願いは園を拠点にして、園がこの地域の場（地域センターの一つ）でありたいというものだった。しかも子どもがそのキューピッド役となって……、子どものつきあいが親のつきあいを生み、親のつきあいが広がると住民の連携意識も深まる、このあたりまえの図式が年とともに大きくなってきた。当園の位置づけも、園が単にあるというのではなく、地域に密着し、根づくなか、十七年目の一年に突入している。

ところで開園頃、園の周囲には仲間の私立幼稚園五園、民間保育所二園、公立保育所四園をかかえるという厳しいなか、通園バスは運行しない、給食や長時間保育はしない、住宅住民への配慮から午後二時以降は音を出さない、課外教室の活動もしない…という条件のなかのスタートであった。今振り返ってみると、右記の状況をクリアしてきた活力、実践活動の数々が今日の園経営・運営の基礎力として育ってきたのではと念ずるところである。以下、二～三の事例から私の目指す園経営、運営

の一端についてふれてみる。

＊

① 子をもつ親のだれもが、園やクラスのようすを知りたいと願っている。

○ 今や園だよりやクラスだよりを発行し、親の期待にこたえる通信活動は、ごくあたりまえ、どこの園でも取り組んでいると思う。当園では開園以来、この通信活動を重視。今秋園だよりは通算一〇〇〇号となる。園だよりの発行は園長の役目。園長の人柄、教育への想いを伝える方法の一つといえる。

② 教育の内容や方法をできる限り親に理解してもらうことを願って…

○ 保育参観の機会をできる限り多く持つ。事前に参観の内容と見どころをクラスだよりにて知らせ、参観後はクラス担任にかわって園長が参観内容、クラスの様子などを伝え、父母の質問にも答える。担任になりかわっての話だが、回を重ねるごとに園と家庭との距離が縮まるのを肌で感ずる。

○ 三か月に二回のペースで〝園長ぶつぶつ会〟なる父母対象の会を催している。子育ての話、教育課程の話、園での悩みごとの話、今頃の子どもの姿の話、幼稚園界の動きについての話、幼小関連の話、生活科の話、保育行事の話…とテーマはつきないが、毎回百人前後の父母が参集。熱気を感ずるひとときである。

○ 具体的な教育内容を伝える一つに「〇期の指導計画」の印刷物がある。期毎の子どもの姿、ねらいと内容、生活指導、安全指導のポイントなどを一枚にまとめ、家庭に配布する。〝わかりやすい幼児教育〟を自認する私にとっては、この三方法は家庭と園を結ぶ接点といえる。

③ 幼稚園は楽しい生活の場である。

○ このテーマこそ開園以来、教育内容の柱の一つとして追求しつづけている課題である。もともと幼稚園は、子どもたちにとって楽しい生活の場である。それゆえに幼児にとって楽しい生活とは、どのような姿なのかを子どもたちと一緒に創り上げていく必要があ

る。

④　幼稚園はいろいろな体験生活のできる場である。

○　幼児期は、頭で学ぶ時代でなく「からだ」で学ぶ時代であるという。ことばでいくらいっても分かってもらえないことが、目で見、鼻でにおいをかぎ、手で触って確かめ、そして頭で考える機会があってはじめて子どもの物を見る目、感じる心、考える力が育つものである。本物との触れ合いの中で育つ子どもの心、今、忘れられているこの体験を身近な生活圏のなかで獲得できる園生活を今以上に送りたいと考える。

⑤　幼児なりに生活する力が獲得できる幼稚園生活でありたい。

○　このテーマも今、求められる課題であり、本園ではいちばん大切にしたい課題である。三歳児は三歳児なりに、四歳児は四歳児なりに…と、それぞれの年齢の園生活を精一杯に、しかも手ごたえを感ずる毎日であってほしいと念ずる日々である。活力のある園生活、生活実感がもてる園生活、そして仲間と生活が楽しめる園生活、そんな幼稚園生活を目指してがんばる毎日である。

七、さいごに

ともあれ今の幼稚園界に求められることは、なにごとにも一所懸命に取り組む姿と活力の復活ではないだろうか。園長を先頭に職員集団が一丸となり、熱意のこもった実践の積み重ねがいつしか親の共感を呼び、私幼の暖かさを伝えていく術となるだろう。本来の幼児教育をそれぞれの園がこれからも考求してほしいものである。

なお、全幼交の出版として『いざというときに役立つ本保育ＯＫ大事典』（世界文化社刊、一九九二年六月一日発売、三九七頁）を公にした。

（横浜市・スカイハイツ幼稚園）